

## 令和5年度 研究概要

<p>所属名</p> <p>カリキュラムセンター</p>	<p>研究会議名</p> <p>外国語教育研究会議</p>
<p>研究主題</p>	<p>自分の気持ちや考えを伝え合うために既習表現を活用する子どもの育成 ～やり取りの言語活動の充実を通して～</p>
<p>育成を目指す 資質・能力</p>	<p>目的・場面・状況に応じて即興で自分の気持ちや考えを伝え合う資質・能力</p>
<p>研究内容</p>	<p>グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力の向上が課題となっている。「話すこと [やり取り]」は、互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動を一層重視する観点から、現行の学習指導要領で新たに設定された領域であるが、令和元年度の全国学力・学習状況調査では、即興でやり取りをする設問において、正答率が1割、無答率が2割と、課題があることが明らかになっている。また、令和5年6月に本市小中学校教諭を対象に行ったアンケートでは、Small Talk や帯活動などで、やり取りの言語活動は少しずつ浸透してきているが、目的・場面・状況に応じた内容よりも、会話を継続することが第1の目的となっている傾向が見られた。さらに、本研究会議の研究者からは、小学校では自分の言いたいことを単方向的に言うことは身につけてきたが、相手の話に興味をもって聞く意識が低いこと、中学校では、新しい表現を日々学習しているが、学習した表現が自由に使えず、学年が上がってもあまり会話内容に変化が見られないことが挙げられた。これらのことから、やり取りの言語活動が、自分の気持ちや考えを伝え合うコミュニケーションの場になっていないのではないかと考えた。</p> <p>そこで本研究会議では、「言語材料に縛られない意味の発信に焦点化した「やり取り」の言語活動の充実を図ることで、児童生徒が既習表現を活用し、自分の気持ちや考えを伝え合うことができるようになる」という仮説を立て、研究を進めることとした。児童生徒は、単元の学習過程では、終末の言語活動に必要な新出の言語材料を意識して使うが、その単元で学んだ言語材料を定着させ、自由に使えるようになるためには、更に自ら選択して使う場が必要となる。言語材料に縛られない意味の発信に焦点化した言語活動は、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて既存の知識を想起し、自ら言語材料を選択して使う場面となると考えた。</p> <p>手立てとして、児童生徒にとって身近で繰り返し使用できるトピックを、小学校、中学校それぞれの段階に合わせて設定し、帯活動としてやり取りの言語活動に取り組む。その際言語習得において、インプットを効果的に行うことが必要だと考えた。本研究会議では、インプットを「コミュニケーションに必要な英語を、教師から与えられるだけでなく、仲間から得たり、自ら探したりして聞くこと、読むこと」と定義した。具体的には、活動前、活動間、活動後の3つの段階において、児童生徒が主体的・対話的に獲得できるインプットの方法を検討していく。検証の方法として、着目児童生徒の会話内容や児童生徒アンケートの自由記述の質的変容、児童生徒アンケートの量的変容の2つから、その成果と課題を明らかにしていく。</p>